東日本大震災の被災地と共に歩む～伴走型支援～ 公益財団法人　共生地域創造財団

「3.11」東日本大震災から5年

※共生地域創造団体は、グリーンコープ、ホームレス支援全国ネットワーク、生活クラブが連携して、被災地の復興支援などをしながら、共生地域の創造をめざす団体です。

2011年4月19日南三陸にて撮影

2016年2月3日に南三陸の同じ場所にて撮影

■5年前、震災当時にあった瓦礫は撤去され、道路工事や防潮堤の建設など災害復旧工事は進んでいるように見えます。しかし、そこで暮らす人々の真の復興にはほど遠く、人々の苦しみは今なお続いています。

■東京電力福島第一原発の事故によって、被災地では今も「3.11」以前の生活に戻れずに多くの人が避難生活を強いられています。

岩手県・宮城県・福島県

避難生活者…183,032人（県内外計）

※福島では101,272人の避難生活者のうち、43,497人が県外に避難をしています。（2015年12月10日復興庁）

本冊子では、この5年間、人と人のつながりを大切に、現地の人々に寄り添い支援活動を続けている公益財団法人共生地域創造財団の支援活動を中心にご紹介します。

「3.11」支援活動の歩み

2011年3月11日～2012年2月

「3･11」、未曾有の大震災。一刻も早く被災地にかけつけようと、グリーンコープは3月14日には大型トラックに支援物資を積んで行く先も決まらない中、東北へ向いました。必死に支援を待つ人のもとへ物資を届けようと支援活動がスタートしました。

2011年3月14日～2012年2月までの1年間に、10トントラック48便、共同配送車112便、合計160便のトラックが、組合員や取引先から寄付された水や毛布、食料等の救援物資を積んで、九州から東北の被災地まで搬送しました。そして、被災地ではグリーンコープの職員(55人)や福祉ワーカーズ連合会の福祉ワーカーズ(51人)がボランティア活動を行いました。瓦礫撤去、泥だし、水産メーカーの機械清掃、救援食料の配布、衣料品などの配布会(累計34ヵ所)を行い、介護現場の支援にも奔走し、被災地の多くの方々と出会いました。それが共生地域創造財団（以下、「財団」）の設立、その後の支援活動に大きな意義をもたらすことになりました。

▲各単協からGCトラックを東北へ陸走

▲日本海側の北陸道を経由して支援物資を納品

3月（GCから被災地行きのトラック23便）

*14日から毎日支援物資を被災地に継続的に搬送開始。
*21日にGC全組合員に支援物資提供の呼びかけを行う。
*3月末までに仮設への物資配達用として、単協からGC元気くんのトラックが被災地に集結（15台）。
*「被災者支援共同事業推進」の拠点作りのため仙台に事務所兼倉庫を借りる、これが後の「財団」となる。
*組合員からの支援物資提供品を抱樸館入居者の協力を受け振分。

4月（GCから被災地行きのトラック36便）

*蛤浜(石巻市)と出会う。支援が遅れた小さな漁港で途方に暮れている亀山さんの話を聞き、浜の復興作業をスタートさせる。
*地元の商品や原料の残留放射能検査の受託を開始。
*支援物資は現地からの要望を受け2日後には納品（卵･豆腐･納豆等が喜ばれた）。

5月（GCから被災地行きトラック19便）

*避難所から仮設への移行が始まり、避難所と仮設の両方に物資配布対応始まる。
*福祉ワーカーズ連合会による専門ボランティアを派遣し、亘理･山元町での支援活動が始まる。
*蛤浜に瓦礫撤去作業開始とプレハブ小屋設置。

6月（GCから被災地行きトラック20便）

*組合員から寄せられた布団約4000組の内の一部は打直し（敷布団600枚）をし、毛布は約15000枚の内2000枚はクリーンニングを行い被災地へ搬送。
*蛤浜での家屋解体と瓦礫撤去のための重機が手配困難なため九州から重機を手配して作業にあたる。
*GC職員にボランティアを募集。被災した工場や蛤浜の瓦礫撤去、避難所･仮設への物資配送の支援に入る。
*蛤浜に漁船(大分の方からの寄贈船）を搬送。
*組合員からの支援物資振分け完了（作業は延べ700人･3100時間）。

7月（GCから被災地行きトラック15便）

*山元町･亘理町の介護福祉施設、デイサービスセンターで福祉ワーカーズ連合会のボランティア支援活動（7月支援人員4名）。
*GC職員ボランティア23人、牡蠣筏準備作業や高橋徳治商店や西光寺の泥だしや機械の清掃や墓石の片付け。

8月（GCから被災地行きトラック5便）

*亘理町のいちご農家斉藤農園の瓦礫撤去支援開始。
*支援長期化に伴い常駐職員1人を配置。伴って公益財団化の準備開始。
*高橋徳治商店本社工場、西光寺の清掃ボランティア支援活動。

9月（GCから被災地行きトラック4便）

*福祉ワーカーズ10人が介護施設へ、GC職員8人が水産工場や物資搬送の支援に入る。
*避難所から仮設への移行が進み、仮設への物資搬送対応となる。
*岩手県大船渡市で、支援の届かない在宅向け支援の活動を強化していく。
*高橋徳治商店本社工場、西光寺の清掃ボランティア支援活動。

10月（GCから被災地行きトラック8便）

*GCに放射能測定室（NaIシンチレーションスペクトロメータ測定器2台）が設置される。
*気温低下で、毛布など配布会用物資を各被災地に配送。
*冬物衣料配布会開催（石巻市、亘理町で8回）。
*高橋徳治商店の第2工場瓦礫撤去作業支援。

11月（GCから被災地行きトラック9便）

*冬着、布団関係を中心に被災地で配布会（亘理町、大船渡市、米沢市、東松島市で5回）。
*福祉ワーカーズ連合会からワーカー8人が介護施設に、GC職員7人が被災地へ物資配送、配布会、倉庫作業の支援に入る。
*11月1日付け、「一般財団法人共生地域創造財団」設立。

12月（GCから被災地行きトラック7便）

*クリスマスとお正月向けにGCの取引先から鏡もち、おせち、お菓子が届き、被災地に配送。
*福祉ワーカーズ連合会からワーカー10人が介護施設に支援に入る。組合員からの提供物資の布団、こたつ布団のすべてを被災地に配布。
*年末に冬物衣料配布会を開催（山元町、石巻市、仙台市宮城野区、女川町、岩手県で9回）。

2012年1月（GCから被災地行きトラック8便）

*福祉ワーカーズ連合会の6人が介護施設に、GC職員3人が被災地へ物資配送の支援に入る。
*大船渡市から「財団」に在宅見守り支援の要請をいただく。
*食料、冬物衣料配布会を開催（山元町、米沢市で6回）。
*放射能検査強化のため、GC放射能測定室に処理能力と精度の高いゲルマニウム半導体検出器を設置。

2月（GCから被災地行きトラック6便）

*在宅被災、仮設で生活困窮のお宅に卵など配達再開。
*冬物衣料配布会を開催（山元町、米沢市で6回）。
*福祉ワーカーズ連合会のワーカー8人が介護施設に、GC職員1人が被災地へ物資配送の支援に入る。

２０１２年3月～２０１３年2月

◆2012年

3月
・宮城県亘理町で農業復興のため加工用トマトの作付の支援開始。
・「3.11」1年後集会開催。

4月
・WATALIS事務所開所式。その後、ＧＣ大震災復興応援企画でFUGUROを案内。
・蛤浜に牡蠣筏用ロープ等の資材を支援。

5月
・大船渡市から委託された「見守り支援事業」がスタート。被災者5人を雇用。
・蛤浜では震災前の筏の数まで復旧が進む。
・女川町で仮設の人々による布草履作りが始まり「うみねこハウス」開所。

6月
・亘理町と山元町の介護施設への人的支援終了（2011年5月～2012年6月27日・延べ101人）。8月からのヘルパー養成2級講座に向けて準備開始。

7月
・女川町の「うみねこハウス」にトイレの設置支援。

8月
・山元町でヘルパー2級養成講座開講（受講者15人）。
・亘理町の加工用トマト初収穫のため、GCからボランティアが支援に入る（延べ35人・日）。
・中高生を対象にした被災地に学ぶ旅。

9月
・亘理町の加工用トマトの収穫のため、GCからボランティアが支援に入る（延べ98人・日）。
・折浜・蛤浜「共同かき処理場」の着工。

10月
・内閣府より「公益財団法人」認可。
・加工用トマト収穫終了（125トン）、その後、白菜、大根作付け。

11月
・被災した大船渡市の小学校や地域のみなさんと一緒に、市内4ヵ所に1ヵ月かけてスクールバス用バス停を設置。

12月
・女川町、福島市、南相馬市で物資配布会を開催。
・蛤浜・折浜共同かき処理場完成。

◆2013年

1月
・蛤浜で剥き牡蠣の出荷再開。

2月
・亘理町のトマトを使ったトマトジュースとケチャップが商品として完成。

２０１３年3月～２０１４年2月

◆2013年

3月
・就労支援事業「笑える牡蠣」販売スタート。折浜・蛤浜の牡蠣の出荷作業現場で
・石巻の若者らの就労訓練の試みを開始。
・「3.11」2年後集会開催。

4月
・「WATALIS」と「うみねこハウス」が法人化して活動を本格化。
・大船渡市より在宅被災者支援事業（見守り・相談事業）を受託。

5月
・うみねこハウスでイチジク定植の作業支援。
・亘理町の農場で、トマト定植3万本の作付け支援を行う。

6月
・ＧＣ大震災復興応援企画の宮城県牡鹿郡女川町の銀鮭漁場をGC共同体田中代表理事が視察。

7月
・髙橋徳治商店の新工場落成式（石巻市から東松島市へ移転）。

8月
・亘理町農業復興で加工用トマト収穫全盛期。しかし長雨による病気不作で収穫量は減。

9月
・介護初任者研修終了。27人が資格取得。
・うみねこハウスのコミュニティー農園で唐辛子の収穫の支援。
・ＧＣからのトマト収穫ボランティア支援（延べ123人）。

10月
・蛤浜、折浜は復興後2年目で牡蠣出荷スタート。

11月
・亘理町のトマト生産者へトマト生産奨励金を贈呈。

12月
・うみねこハウスの周辺は嵩上げのための埋立となり移転。
次の活動拠点となる女川「ゆめハウス」落成。

◆2014年

2月
・「福島ぽかぽかプロジェクト」への支援（福島の子どもたちの保養先にＧＣの食品を送る活動）開始。以降も継続（年に10回）している。

２０１４年3月～２０１６年2月

◆2014年

3月
・福島支援「ひまわりプロジェクト」として、募金・ひまわり栽培検討開始。
・折浜、蛤浜の牡蠣は放射能検査を行い、「検出なし」の検査結果を確認。
・宮城県亘理町逢隈児童館にサッカーボール贈呈。
・「3.11」3年後集会開催。

4月
・女川「ゆめハウス」のコミュニティー農場にイチジク38本を植樹支援。
・大船渡市より在宅被災者支援事業受託（3年目）。

5月
・亘理町の御神輿復興祭で支援先の丸子農園にＧＣ菓子５０人分を贈呈。
・ＧＣの組合員宅や、施設・店舗で、福島支援のためのひまわり栽培始まる。

6月
・大船渡市で、被災地における生活困窮者支援勉強会開催（150人）

7月
・「福島ぽかぽかプロジェクト」を視察訪問、ＧＣびん牛乳が子どもたちに人気。

8月
・亘理町農業復興で加工用トマト収穫全盛期。しかし、長雨による病気不作で収穫減。

9月
・福島県川内村との出会い。避難先の郡山南一丁目仮設への支援開始。
・大船渡市で、被災地における生活困窮者支援勉強会開催［2回目］。

10月
・福島から「ひまわりプロジェクト」主宰者の「シャローム」と、女川から「うみねこハウス」のみなさんがＧＣ地域運動交流集会で活動報告。
・大船渡市で、被災地における生活困窮者支援勉強会開催［3回目］。

11月
・「財団」が保有するキッチンカー、川内村の仮設等での活用が決定。
・ＧＣからひまわりの種を福島に出荷（８０ｋｇ）。
・大船渡市から生活困難者自立支援モデル事業受託。

12月
・福島で開催のひまわり感謝祭にＧＣおおいた理事長、ＧＣふくおか福岡地域理事長が出席し、福島の現状を視察。
・大船渡市の仮設協議会メンバーとなる。

◆2015年

1月
・亘理町の斉藤農園のいちごが震災後初出荷。販売支援としてＧＣ連合職場内で販売を行う。

2月
・震災後、三陸牡蠣の相場価格が暴落していたが、今期は価格上昇で蛤浜・折浜の牡蠣の出荷は順調。

3月
・「福島ぽかぽかプロジェクト」の子どもたちが、千葉県鴨川市の内浦県民の森で保養。
・ＧＣ食材のびん牛乳・食パン・元気くんパンが大人気。
・被災地に学ぶ集会をGCふくおか主催で開催。
・大船渡市の自立支援事業終了。

4月
・福島子どもひまわり大使が夏休みにグリーンコープ訪問決定。
・大船渡市より在宅被災者支援事業（みらいサポート）を受託（4年目）。

5月
・東日本大震災復興応援被災地支援ボランティアを短期募集し、ＧＣふくおか・ＧＣくまもとの職員が女川・石巻・福島で、農業・漁業支援及び仮設内の掃除等作業。

6月
・「財団」主催の大船渡市ともいき祭開催。
・「財団」所有のワゴン車両を福島川内村の送迎用で活用開始。

7月
・福島市の保育園「こどものいえ　そらまめ」の門間園長との出会い。グリーンコープ食材の毎週支援開始。

8月
・福島の「花見山を守る会」と出会う。各生協で桜植樹の支援検討。
・福島子どもひまわり大使が、糸島（遊学舎）、柳川（無名舎）、熊本（サンシャインワークス）、小国町役場を訪問。

10月
・蛤浜・折浜、爆弾低気圧による強いシケで出荷間近の大粒牡蠣（2年目）がほとんど海に落下し大損害発生。
・グリーンコープで収穫したひまわりの種120kgを福島に発送。

11月
・亘理のトマトの収穫は、病害、台風や突風の影響で凶作となり、収穫量が激減。「亘理の真赤なトマトケチャップ」を1万本製造。

12月
・蛤浜、折浜へ、共同体代表理事とＧＣふくおか理事長が災害見舞金贈呈。
・福島「ひまわり感謝祭」にＧＣから4人出席。
・蛤浜・折浜の牡蠣出荷作業で10代～50代までの就労訓練生8人が参加。

◆2016年 1月・2月

・「WATALIS」が手仕事で集まる亘理の女性たちを対象にしたコミュニティーカフェ「中町カフェー」をオープン。開所に向け「財団」が支援。

蛤浜（はまぐりはま）（石巻市）

漁業復興支援

「生きていれば、きっと笑える時がくる…」

2016年2月4日蛤浜 撮影

2011年３月末。目を覆うばかりの惨状の石巻一帯。その中の小さな漁村の折浜（おりのはま）・蛤浜（はまぐりはま）の支援が始まりました。避難所になっていた浜の集会場で迎えてくれたのが、長年漁師として生きてきた蛤浜区長の亀山さん夫妻でした。夫妻の笑顔の奥には深い悲しみと戸惑いがありました。亀山さんは震える手で支援物資の中にあった一通の絵手紙(GCおおいたの組合員から)を取出し語りました。「私たちは、今回の津波ですべてを失いました。でも一日一日をこれで生かされているんです」と。悲惨な状況の中で亀山夫妻に生きる力を与えたのは「言葉」だったのです。人生には「笑えない時」があります。この手紙の意味こそが私たちにとっての震災支援の糧となりました。

震災直後の蛤浜の様子

2015年12月折浜・蛤浜に災害のお見舞金を届けました。
※支援が始まった当初、亀山さんは支援をしてもらうばかりの状況に苦しんだと言います。被災の惨状が凄まじい中でも人の役に立ちたいということです。それを踏まえて、今があります。

牡蠣出荷の再開と浜の復興に向けて

復興のため、まず牡蠣の出荷再開をめざしました。財団やGCのボランティアも一緒になって準備に汗を流しました。そして、2013年から牡蠣処理場で牡蠣の加工と出荷作業がスタート。しかし、初出荷の喜びもつかの間、相場価格が震災前の3分の1にまで下落。原因は、風評被害と他産地商圏拡大。そこでGCは殻付牡蠣直送企画を行い、多くの組合員や職員が購入して支援をしました。

2015年初めに牡蠣の相場価格も震災前に戻ったものの、10月爆弾低気圧で大粒牡蠣が海底に落下するという災害に見舞われました。そんな中でも、亀山夫妻からは「私たちはみなさんのおかげで浜の復興ができたんです。漁師をしていたら、こういうことはあります。だから心配しないで!」と力強い言葉が発せられました。

蛤浜での就労訓練事業とコミュニティーハウスの構想

就労訓練事業

折浜・蛤浜牡蠣処理場の一部を借りて殻付牡蠣の加工と出荷作業を石巻の若者たちの就労訓練として行っています。浜の関係者からは不慣れな就労訓練生に作業のしかたのアドバイスをいただきながら、漁師と就労訓練生とより良い関係を築くことで大きな収穫につながっています。

コミュニティーハウス構想

「就労訓練生が集い作業するスペース」「訓練生と浜の漁師さんが交流する」「就労訓練生が休息をとる」「蛤浜訪問者と交流する」「調理をする」。そんな空間を構想しています。

コミュニティーハウスの完成構想図
イメージ図

WATALIS（亘理町）

コミュニティー復興販売支援

「WATALIS」は震災後に発足。タンスに眠っていた古い着物をほどき、再利用した布巾着（FUGURO）や小物を手作りしています。そしてその活動は被災地の亘理の女性たちが自立していくための生きがいや居場所作りとして育まれていきました。
これまでに延べ4500人近くの亘理町の女性たちがWATALISに集い、手仕事ワークショップにも参加しています。

WATALIS ロゴ

WATALIS代表 引地 恵さん

かつて亘理に暮らす人たちは、感謝の気持ちをあらわして、お土産やお礼に、着物の残り布で仕立てておいた袋に一升のお米を入れて渡していたそうです。東日本大震災の折に取り壊された呉服店から譲り受けた古い着物生地で袋（FUGURO）を作り、製品化したのが「WATALIS」のスタートです。

【地域住民の声から見えてきたこと】
震災直後から何とか息抜くために立ち上げたWATALIS

①子どもと一緒に参加できるコミュニティ
「夏休み中、子どもと参加」
「子どもたち皆で集まる場所があってとても嬉しい」

②世代間交流の機会となっている
「年齢層がいろいろで楽しいひと時を過ごせた」
「お友だちや地域の方々と一緒に作ることができた。とてもよい交流の場」
「家にいるばかりより楽しい」

③ストレス解消の場
「参加者と交流・情報交換が図れ教室に来るたび性格が明るくなった」
「作り終えるととても楽しい気持ちになる」
「生活のアクセントになった」
「皆でおしゃべりしてストレスが解消された」

※平成26年度社会福祉振興助成事業「生きがい創出型手しごとワークショップ」より抜粋

中町カフェー

- 亘理町は東日本大震災で住民306人が亡くなったほか被災地から転出される人が増え、人口が震災前から約1450人も減りました。被災地域においては、人の流出や被災者それぞれ復興・復旧の差もあり、震災前に比べて住民同士のつながりや助け合う気持ちが希薄化していくことが問題のひとつになっています。
- WATALISは、大震災から約半年後の2011年10月に起業しました。引地代表を中心に、亘理町で「手仕事」をつうじて、子育て中の女性には家計を支える一助となる収入づくりと生きがいづくり、高齢の女性は、手仕事の指導を行うことで孤立しないよう、楽しい居場所づくりや交流の環を育んできました。
- 震災後、「働く」ということが経済的にも精神的にも自立に大きくかかわることを改めて感じた女性たちが、WATALISに集うようになりました。そして、2016年2月18日、WATALISは亘理町の子育て中の女性や高齢者の人たちから、「地域に暮らす人たちがもっと気楽に集いお茶飲みができ、交流が深まる居場所がほしい」という声に応えようと、所在地から名づけた「中町カフェー」（コミュニティーカフェ）をオープンしました。
- 引地代表は「高齢者と交流を深め、地域の文化や記憶を若い世代に引き継ぐのが私たちの役割。従来のものづくりに加え、新たに集う場を提供し、震災で散り散りになった住民のつながりを取り戻したい」と話しています。
- カフェの設立に賛同する地域住民の中でも最年長の山形トシ子さん（83）は「みんなの想いを形にしたカフェです。高齢者が元気に外出するきっかけになればいい」とWATALISのワークショップやカフェの取り組みに期待しています。

財団は「WATALIS」の取り組みに賛同しさまざまな支援や相談をしてきました。地域復興の一つのカタチとして、今後も共に歩んでいきます。

うみねこ（女川町）

コミュニティー復興販売支援

一般社団法人コミュニティースペース
～仮設住宅の集会所で布草履作り～

「3．11」から3ヵ月が過ぎた頃、八木純子さんは「支援を受けるだけではなく、被災者が立ち上がるための活動をしないといけない」と感じるようになりました。
その思いに仮設で孤独に過ごす女性たちが呼応し、まずは布草履作りから始まりました。集会所には笑顔に溢れる女性たちの声。1日に1足しかできなくても、みんなが集まり、みんなと笑い、話ができることが何より心を癒してくれたそうです。
この布草履は、支援物資として届いたTシャツを割いて編みます。材料費がかからないこと、高齢者でもできる手仕事であることもポイントでした。布草履の応用として鍋敷きやキーホルダーを制作するなど、コミュニュティースペースはさらに活気がでてきました。

大津波で唯一残った八木さんの実家の隣の倉庫を活用して コミュニティーカフェと果樹園を作る、それが「ゆめハウス」構想

布草履作りで女性たちは元気になり、次は男性たちの居場所作りや生きがい作りへとすすみました。まず2012年秋から女川町高白浜に果樹園を作るプロジェクトがスタート。雑草とり、水撒き、防獣ネットの整備などを男性（高齢者を中心）に任せることにより、生きがい作りと自立に向けての一歩を踏み出しました。「財団」の支援が何よりも心強いと八木さんは言います。果樹園で樹木の世話をしているのは現在4人。その中には、船を失った元漁師さんもいます。震災によって、人生を翻弄されたお父さんたちのチャレンジ。それを記録しようと日記をつけるようになりました。

地域の高齢者の生きがい作りはどんどん実現! 「果樹園cafeゆめハウス」営業中!

料理を担当するのは布草履作りをしている女性たち。人気の「日替わりランチ」は、500円。ご飯と味噌汁に煮魚などの主菜、煮物やお浸しなどの副菜が3つも付いた、ボリューム満点のメニュー。お父さんたちが育てたイチジクや野菜も料理に使われています。イチジクのデザートは大好評!

一般社団法人コミュニティースペースうみねこ 代表八木純子さんからのメッセージ

一般社団法人コミュニティースペース
うみねこ代表の八木純子さん

最近は若い女性や男性も「ゆめハウス」で働くようになってきました。被災地は居場所作りやいきがい作りがもっともっと必要であると痛感しています。若い女性はハーブ作りを、男性は木工製品作りをやっています。それからみんなで「サンマなたい焼き音頭」でCDデビュー!夢は紅白歌合戦へ出場でーす!

さんまnaたい焼きの販売も好調！

子どもたちにも地元でも大好評。東北を支援したいというたい焼き屋さんに指導を受け、おばあちゃんたちが丁寧に焼いています。女川の特産品のサンマを象った「さんまnaたい焼き」を開発しました。

斉藤農園（亘理町）

農業復興支援

震災前まで、亘理町でいちご農家だった斉藤さん一家を大津波が襲い、ハウスと家屋が一瞬のうちに壊滅。一時、農業を断念しましたが、2014年、小規模ながら復興いちごを初出荷することができました！

斉藤さんは、「震災で家屋や畑が被災したとき、もうだめかと思った。でもみなさんに瓦礫の片付けからやっていただいた、食料や物資もいただいた。2014年ようやく、いちごを復興できた。おかげで一息つけました。何から何までお世話になっているのでお返しをしたい気持ちでいっぱいだ」と言います。

◇斉藤農園とは2011年4月からの物資支援で知り合いました。自宅跡にプレハブ倉庫を置き、畑の瓦礫撤去、そして義理の息子さんが大工だったことから自力で自宅を再建しました。

◇一時、農業(いちご栽培)再開は断念していましたが、何度か他の畑に手伝いに行く中で野菜を作ってみようかと農業復興に意欲的になり、2012年4月に葉野菜作りからスタート。「財団」のネットワークや近隣の方に販売。

◇2014年から復興いちご(もういっこ)の栽培・販売を再開できました。しかし、まだいちごハウスは3棟で大震災前と比べると1／5の規模です。これから少しずつ拡大される事になります。

◇いちごの栽培作業をしているときのイキイキした笑顔の斉藤さん夫妻。震災前のいちごハウスの規模に少しでも近づけることができるよう応援していきます。

農事生産法人

マイファーム亘理協同組合（亘理町）

津波で壊滅的被害を受けた亘理町の農場で、塩害に強い加工用トマトを栽培し、それを原料にトマトケチャップやジュースを作って４年目になります。２０１５年は３年続きの不作になり、津波を被った農地での農業復興の厳しさを痛感することになりました。
現在、亘理町の海岸沿いではメガソーラー設置や公園に、そして、大きなイチゴファーム団地が行政によって設置され、新しいカタチでの農業復興が少しずつ進んでいます。これまでのマイファーム亘理のトマト農場の場所も、圃場整備に入り大規模農業が行えるように整備されます。
この間、大津波によって何もなくなったところから、地域の方々の先導役としての役割を果たしきましたが、今後は現在の状況を踏まえて、この間の取り組みを終え（解散し）、近隣農家の方々と財団とで、近くの圃場で新たにコミュニティー農園を作り交流を進めていくようにしています。

※GCよりトマト収穫ボランティアとして、のべ１６４人が作業の手伝いをしました。

“「3.11」を忘れない!”助け合い、支え合って…、頑張るメーカーのみなさん

おとうふ揚げのメーカー

髙橋徳治商店（松島市）

◆震災前、３つの工場を持ち、さつま揚げやちくわなど、化学調味料や防腐剤を使わない無添加練り製品の製造・販売を行っていました。
◆「３．１１」の津波ですべての工場は壊滅状態でしたが、青森や鹿児島からも駆けつけた、「財団」やGC職員のボランティア延べ１５００人以上がヘドロをかき、器具を洗い、製造ラインの早期復旧を後押ししました。
◆被災から3～4日後に本社工場に立ち入ったときのことを、社長の髙橋英雄さんは「何も考えられずに、もう立ち上がれないと思った」と振り返ります。

被災した旧工場

東松島市の新工場

髙橋徳治商店社長 髙橋秀雄さんのメッセージ

あの震災や原発事故から5年…。18万人が仮設暮らしで29.5%が鬱（うつ）病、10万人が放射能で戻れず棄てられ忘れられても、「“こころ”という目や生き方を持つんだよ」と自分に向き合い、何度も言い聞かせてきた。食に心無くしては喉もと過ぎるまでのエサ、心まで届く食って人を変えるかもしれないな。さぁ新たな５年をみんなの痛みを脇に抱えてこの地で必要とされる会社になるまでしっかり歩いていきます。

さんま黒酢煮のメーカー

（株）ヤマホンベイフーズ（女川町）

代表取締役
山本文晴さん

◆2011年3月11日、東日本大震災の大津波によって弊社8工場すべて壊滅的な被害を受けました。しばらく従業員や家族の安否も分からない状況でした。少し落ち着いてきた3月下旬、全従業員を集め状況を説明し全員を解雇。長年共に働いてきた同志を解雇するのは苦渋の決断でした。いつ復興できるかわからない状況の中、また一緒にやろうと再会を夢見て別れました。
◆4月に入り、旧従業員を募って、建物が残っていたヤマホンベイフーズの工場に向かいました。全商品のレシピ・製造工程や、会社の重要データが入っているUSBメモリーを探すのが目的でした。瓦礫が散乱しており見つかる可能性は低かったのですが、一人の従業員が瓦礫の中から、基盤がむき出しのUSBメモリーを発見。すぐに専門業者に依頼したところ、全てのデータが残っていました。これで何とかなると歓喜したのを覚えております。
◆残ったデータを基に、まず製造を再開したのが、人気商品だった「さんまの黒酢煮」でした。震災被害が少なかった、石巻市中里にある直売所のバックヤードを加工場に改造し、震災以前と同様に手作りで”家庭の味”にこだわって製造しました。

◆ヤマホンベイフーズの新工場建設にも奔走していました。おかげさまで2013年5月に新工場が建ち、復旧再開することができました。当社のような加工メーカーが復興するには、商品を作るだけではなく、販売して消費者が食べて、初めて真の復興になると思います。
◆皆様の協力があって、被災地は復興していける。いつも注文を頂き支えていただきほんとうに感謝しております。

〈山本代表取締役より〉

「震災で全壊した旧工場」

女川町にできた新工場兼事務所（２０１３年５月）

震災前、サンマの取扱量は2万トンもあり、女川で一番の大口生産をしていた。

カラスカレイの加工メーカー

山長遠藤商店（女川町）

旧工場イラスト

◆㈱山長遠藤商店は、震災で代表取締役である父親が亡くなり、急遽跡を継いだのが現在の代表取締役の遠藤鋭壹（えいいち）さんです。震災で工場が全壊したことで、従業員も一旦全員解雇せざるを得ない状況になりました。親族会社と協力し合い、親族会社の中で唯一被災のなかった工場に同居し、復興をめざしています。
◆遠藤社長は、「父から教わったカラスカレイ加工技術を引き継いでいきたい。グリーンコープと是非一緒にやりたい」と話します。

4つの親族会社の若きリーダーとして再建を
決意して頑張っている遠藤社長

GC三陸産カットわかめの加工メーカー

（株）かわむら（気仙沼市）

震災で壊滅した工場

◆気仙沼市と陸前高田市に合わせて２１ヵ所の工場と冷蔵庫を所有。震災で高台にあった４施設を残し全ての施設が津波に流されてしまいました。そんな中、従業員全員が無事で、地場の雇用を絶やすことを避けたい、今まで培ってきたブランドを絶やしたくない思いで、被災地でもいち早く復興に向け立ち上がりました。

同じ場所に新工場を建設

わかめ生産・加工メーカー

重茂漁協（おもえ）（岩手県宮古市）

重茂漁協わかめ工場（震災直後）

◆漁船814隻のうち798隻が流出。10ヵ所の漁港施設、海上の1310台もの養殖施設も全壊。こんぶやわかめなど天然資源も流出し、生活基盤すべてを根こそぎ奪われてしまいました。
◆しかし立ち上がりは早く、漁船や養殖施設の共同利用案や再建方針も早々に決定し、漁船の回収や復旧作業も開始しました。震災から１ヵ月後には７０隻もの漁船を確保。その年の５月に天然わかめ漁が復活。無事だった個人のボイル加工施設で皆がともに作業を行い、浜は少しずつ再生へ向かって動き出しました。復興はまだまだですが、多くの方に支えられて前進しています。

復旧が進む重茂漁協わかめ工場（現在）

忘れない・つなげよう・寄り添う気持ち

労働協同組合グリーンコープ
福祉ワーカーズ・コレクティブ連合会

現地調査から取り組みが始まりました

2011年5月の被災地支援の現地調査から2012年6月27日まで、宮城県山元町、角田町、亘理町を中心に、福祉ワーカーズ連合会から毎週2人単位で延べ101人(延べ789人・日)のワーカーを派遣しました。

5月の現地調査でケアマネジャー高橋朝弥さんに出会い、主な支援先を宮城県山元町の介護老人保健施設アルカディアウェルとし、支援活動を行いました。

介護老人保健施設アルカディアウェル

支援に出向いたワーカーは、被災者である職員の皆さんが少しでも楽になるように、常に後方支援に努め、シーツ交換、車いすの点検・清掃、洗濯等を行いました

支援先は、デイサービスセンター「フィット」、「やました」、「えん」と広がっていきました。その中でも、津波で施設の全てを流されたにもかかわらず、自宅を改造して3ヵ月後にサービスを再開した「デイサービスセンターえん」の齋藤さん夫妻とは、現在でも毎年の福祉ワーカーズ連合会総会に参加し、復興の様子を共有するなど「友好団体」としての交流を続けています。また、WATALIS、大船渡仮設住宅、うみねこ「ゆめハウス」の皆さんの手作りグッズ販売支援にも毎年協力しています。

就労支援にむけた人材育成の取り組み

2012年8月から「2級ホームヘルパー養成研修宮城講座」開催

現地の雇用に役立つ支援が必要とされていることが分かり、就労支援につないでいくために、これまでの人的派遣を超えて、「2級ホームヘルパー養成研修」を開催しました。通信、座学、実技の講師陣や事務局をワーカーが担い、施設実習や実技講習に関しては、高橋朝弥さんを通して地元の11社の事業所に協力をいただきました。

2級ホームヘルパー養成研修の様子

2012年8月1日の開講式には、15名(男性2名、女性13名)、20代から70代の幅広い年代の受講生が集まりました。仮設住まいの方、気持ちの整理がつかないが、資格取得をして思い切って前向きに踏み出そうと考えている方等、それぞれの状況を抱えての参加でしたが、資格取得後6人が福祉関係に就かれたことは、私たちにとてっも嬉しいこととなりました。

14名が修了式に参列

2014年11月から「介護職員初任者研修宮城講座」開催への支援

高橋朝弥さんから宮城での開催支援依頼があり、開講申請手続き、通信教育添削講師をワーカーズが担うことで、15人が資格取得し復興の足がかりとなる人材育成につなげることができました。

実技講習の様子

修了式

カンパ金を活かした取り組み

2011年に500万円のカンパを在宅福祉ワーカーズふくおか連合きらめきから拠出し、その後も支援が継続できるように各県のワーカーズでは、機会あるごとに地域でバザー等を行ないカンパ金を募る取り組みを続けています。
また、年末カンパ(ワーカー一人ひとりが100円を拠出して地域福祉に支援する取り組み)先としてデイサービスえんへ、2011年、2012年と続けて支援を行ないました。
きらめきでは、2013年5月に被災地に絵本や木のおもちゃを贈呈、2013年12月に大船渡への視察を実施しました。受けて、連合会では2014年3月に逢隈児童館にドッジボール・サッカーボールを贈る等などの支援を実施しました。

2015年度は、年末カンパ先として出会った陸前高田市の子どもたちの居場所づくりの活動をしているNPO法人パクト「みちくさルーム」へクリスマス行事に支援金とグリーンコープ連合にも協力いただきグリーンコープのお菓子を送りました。
アルカディアウェルの高橋朝弥さんやえんの齋藤さんがスマイルファクトリーとして取り組んでいる地域の人々へ向けての「ノルディックウォーキング事業」に支援を行いました。
福島「NPO花見山を守る会」桜の苗木を寄贈する支援活動に賛同して、グリーンコープ共同体に連帯し取り組みを行いました。

スマイルファクトリーの取り組み
「えん」の齋藤さんがノルディックウォーキング講座の講師

被災地に思いを寄せて

福祉ワーカーズ連合会では「忘れない・つなげよう・寄り添う気持ち」をスローガンに、被災地支援を2011年の震災発生から10年と考え2020年まで継続するとし、2020年時点の様子からその後の取り組みを検討するとしました。

今後も、ワーカー一人ひとりが震災を忘れず、思いをつなげ、寄り添う気持ちを意識できるように、グリーンコープ共同体、共生地域創造財団と連帯し社会福祉法人グリーンコープとも共有しながら具体的な取り組みを考え、支援を継続していきます。

岩手県大船渡市への緊急支援から 在宅・仮設・復興住宅への見守り支援へ

▲2011年6月21日 大船渡市を撮影

▲2016年10月31日 大船渡市を撮影

大船渡市の被災状況と初期の支援活動

●人的被害
死亡者340人 行方不明者79人
●建物被害 5,577世帯
全壊2,791、大規模半壊430
半壊717、一部損壊1,639
●物的被害 判明分　1,077億円

※2015年9月末現在建物用地の浸水面積が岩手県内最大。全壊・大規模半壊・半壊等の被災住宅は約4割。特に市街地の商業地が壊滅的被害。

【共生地域創造財団による支援状況】

2011/09~2011/10	調味料配布	235世帯
2011/11~2012/04	毛布配布	327世帯
2012/02~2012/04	冬服配布会	185世帯

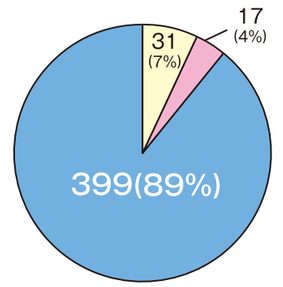
物資の配布と併せて生活状況の聴き取りを実施しました。それによって、生活困窮や心身の疲労。高齢独居や障がいなど要援護者の存在をきめ細かく把握することができ、支援に生かしていきました。

大船渡市との協働事業（2012年5月～）

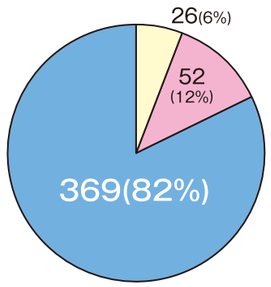
震災から1年間の活動の中で浮き彫りになってきたのが、被災しながらも仮設住宅等で生活せず（できず）、支援の届きにくい自宅で過ごしている「在宅被災者」の窮状でした。「財団」では在宅被災者に特化した支援活動の必要性を大船渡市に訴え、地域福祉課からの委託事業「大船渡みらいサポート事業」の受託に至りました。行政でも把握できていない在宅被災者の状況を調査するため、津波浸水域に建っている住居への全戸訪問を実施。初年度で569世帯を訪問し、その内447世帯が在宅被災世帯であることを把握しました。懸案ありと判断した世帯に対しては、その後も見守り訪問し、課題解決に向けた相談や他機関へつなぐなどの支援を行っています。

2015年12月17日に大船渡市赤崎町にて共生地域創造財団スタッフが仮設住宅被害者を訪問し、市の広報誌を手渡しているところです。

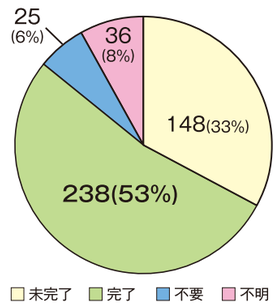
■ 震災後の変化①（身近な死亡者の有無）



■ 震災後の変化②（就労環境の変化）



■ 自宅修繕状況



コミュニティー支援

高齢者の孤立など、一時的な支援では解決が困難な課題に対しては、地域での支え合いが重要と考え、コミュニティ支援にも取り組んできました。小中学校が全壊し、子ども達がスクールバスで通学している赤崎地域では、地域住民と学校・児童と協力してバス待合所をつくるイベントを企画。待合所は今も子ども達やお年寄りに利用されています。他にも、サロン活動を通じ、地域のつながりを創っています。

大船渡市応急仮設住宅支援協議会（2015年3月～）

大船渡市は2014年11月に、仮設住宅団地の撤去・集約化計画を発表しました。翌年3月には、計画の円滑な遂行に向けた協議会が設立されています。
仮設住宅の撤去により、学校の校庭や民有地を仮設住宅から解放することは、復興に向けた重要な取り組みとなっています。一方で、仮設住宅に住む方の中にはまだまだ課題を抱え、住宅再建の目処が立たない方が多いのが現状です。「財団」は協議会において、こういった復興から取り残される方々への生活再建支援を担っています。

2015年12月17日に大船渡市中赤崎にて、共生地域創造財団スタッフと、中赤崎の地元の方々がクリスマスリースサロンを開催しました。

大震災前は同じ地域で暮らしていましたが、震災で仮設住宅やみなし仮設に入居することになってしまい、みなさん別れ別れになってしまいました。同じ地域で被災した財団スタッフの呼びかけで、各地に移り住んだ人たちが1ヵ月に1回のペースで集まり、楽しい時間を過ごす里帰り・サロンです。

まだまだ事故は終わっていない…

東京電力福島第一原発の事故は、大変な状況に変わりはありません。

▲爆発した時の3号機
（インターネットより）

溶けた核燃料はどこ？

福島第一原発の事故は、1～3号機が炉心溶融、4号機では約1,600本の使用済み核燃料を保管しているプールが大きな損傷を受け危険な状態でした。4号機の使用済み核燃料の撤去が2013年1月から12月まで1年をかけて終了。しかし、1～3号機の溶融した核燃料の所在はいまだ不明。それを探ろうと、2015年3月中旬、宇宙線から生じるミュー粒子を使って1号機の原子炉内を透視。すると「核燃料があるはずの場所になかった」と驚きの結果でした。4月10日、格納容器内部を調査するロボットが投入されましたが、トラブルでロボットが動かず作業は中断。4月15日に2台目を投入。途中で走行不能。高線量のため人は近づけず、今後もあてにならない調査ロボットに頼らざるを得ない状況です。

いったいどのくらいの放射性物質が放出？

2013年10月4日、東京電力広瀬社長は、「セシウム134と137を合わせて2万兆ベクレルが大気中に放出された。現在も毎時1,000万ベクレル、放出されている」と語っています。セシウムだけではなく、測定をしていないヨウ素やストロンチウム、プルトニウムなど60種以上の放射性物質が放出。総合するととんでもない量の放射能がまき散らされていることになります。しかも大気中のみならず海洋へも最大200億ベクレルのセシウムが放出されています。

汚染水問題に翻弄される事故現場

毎日約300トンの汚染水が発生している現状はずっと変わらず、凍土遮水壁も抜本的な解決策になっていない様子です。「多核種除去装置ALPS」も本格稼働に至っていません。

さらに新たな問題発生。高濃度汚染水の処理の際に出る廃液の貯蔵容器で水素ガスが発生し廃液があふれ出るという異常事態になっていると言われています。

▲今の福島第一原発の様子
（インターネットより）

福島に奇形の動植物が発生している?!

帰還困難区域で見つかったもみの木

正常なモミの木

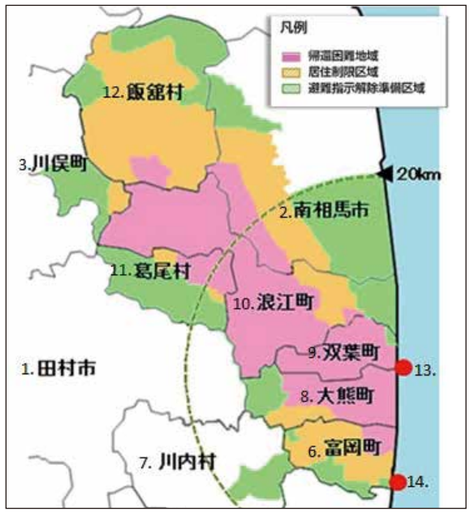
（環境省調査）

放出された放射能の影響を受けて、自然界に異変が起きているという情報が後を絶ちません。

北海道大学の調査でワタムシに奇形が発生している様子が報告されています。また、環境省が、帰還困難区域3地点でモミの木を調査した結果、中心となる幹が枝分かれしていたモミの木が見つかった、空間線量が高い地域ほど多かったという報告もあります。

ただ、これらの異変が福島第一原発事故の放射能の影響かどうか科学的な因果関係ははっきりしていないそうです。

「3.11」原発事故によって、福島で県内外に避難されている方は101,272人（2015年12月10日現在）、その内、県外に避難されている被災者は43,497人もいます。



原発事故に伴う避難区域の設定により避難を余儀なくされ、未だ多くの人たちが県内外で避難生活を続けています。

- 帰還困難地域は、原則立ち入り禁止となっている。
- 居住制限区域については、原則住民の日中のみの出入りに制限されている。
- 避難指示解除準備区域宿泊ができない等、一部制限はあるものの、立ち入りは原則自由になっている。

この色分けによって、福島は国の保障を受ける人・受けられない人、避難する人・帰還する人等、様々な差別問題が発生しています。

また、放射能は福島県内外にもホットスポットという高濃度汚染地点がたくさんあります。

高濃度に汚染されたところで生活せざるを得ない人々がいる!!

2015年6月、グリーンコープは、GC放射能測定室保有の放射能測定器（NaIシンチレーション）を南相馬市の小澤洋一さん（南相馬・避難勧奨地域の会世話人）に寄贈しました。

小澤さんは、早速、南相馬市の近隣の民家周辺の土壌を計測しました。測定結果をみると、もっとも高い場所で原町区は162万ベクレル/kg、小高地区は1.06万ベクレル/kg。猿の糞からは5万ベクレル/kg、山からの雨水が貯まる場所の土は10万～99万ベクレル/kg、国道4号線県立医大西側は7.9万ベクレル/kgという数値が検出。凄まじい放射能汚染です。

屋根瓦に固着したセシウムによる被ばくを避けるため、2階にある子ども部屋を1階に移動するといいます。また、屋根を伝う雨どいの水は最終1階の排水口に集中して流れます。そのため、排水口付近の土壌の汚染が凄まじく高いそうです。

南相馬市は美しい柿の産地。今年もたわわに実がつきました。しかし、食べることはできません。

▲NaIシンチレーション測定器で測定中の小澤さん

公園の土壌を測定したら高濃度だった!

外で遊ぶ小さな子どもにはほんとうに危険です。

「原発事故から5年。放射性物質を含んだ雲は海からの風で北西に流れて山間部を汚染しました。山を汚染した放射性物質が西風に乗って飛んできます。国は安全と言い、私が暮らしている南相馬市のこの区域を避難指示解除しましたが、福島原発から25kmのここが安全なんてとんでもないことです。農作業や草むしりをされている高齢者はとくに心配です。土ぼこりを吸うこともある。それなのに国が田畑などを含めた生活環境の全部を測定せずにここは安全なので帰還して暮らしなさいというのはおかしい」と小澤さんは言います。

福島の子ども支援へ…

福島の子どもたちを、思いっきり遊ばせてあげたい。

- 福島ぽかぽかプロジェクトは、せめて、一月に一度は福島の子どもたちを放射能汚染の心配のないところ（猪苗代湖や喜多方等）で思いっきり遊ばせたい、そういうお母さんたちの願いからスタートした取り組みです。
- 2013年からぽかぽかプロジェクト参加者は約500人。線量の高い地域に住む子どもたちは、思いっきり外で遊べていない状況が続いています。甲状腺がんの子どもたちも増えているとの報道もあり、福島のお母さんたちはとても心配です。
- グリーンコープは2014年2月から年10回、保養先に安心・安全なGCの産直びん牛乳や産直たまご、産直野菜、魚介や食品を、福島ぽかぽかプロジェクトに送っています。

福島原発から約100km離れた猪苗代のシェアハウスで、年に10回保養支援を行っています。思いっきり遊び、料理もします。食材はグリーンコープと生活クラブで支援しています。

ぽかぽかプロジェクトで遊ぼう!

保養地の猪苗代で子どもたちは元気に走ります

★ぽかぽかプロジェクトに参加されたお母さんたちから九州の野菜や食材が欲しい、放射能の心配がなくて安心・安全な食材が食べたいという要望があります。グリーンコープは今後もできる限り応えていきます。

★福島原発から離れた福島市や伊達市など中通り地域にも、放射線管理区域の場所が多く存在します。除染してもその効果には限界があり、しばらくすれば元の線量に戻ってしまうことも多々あります。そこで暮らさざるえない子どもたちが線量の低い地域で保養ができる取り組みはとても重要です。グリーンコープも精一杯の支援をしていきます。

＼GCびん牛乳が大人気！／

こんなにおいしい牛乳が飲めてうれしい！

★仕事や家族の都合で、そこにとどまらざるを得ない人たちや、週末などに気軽に参加できて子どもたちがのびのび元気に遊ぶことができる「ぽかぽかプロジェクト」の活動は、今後も続いていきます。

福島の保育園　こどものいえ そらまめ

門間（もんま）園長と子どもたちへの食べもの支援

福島の「こどものいえ そらまめ」の園児は現在4人。2015年8月から、グリーンコープの食品やせっけんなどを届けています。

「3.11」前、福島市渡利地区の「こどものいえ そらまめ」の園児は23人でした。しかし、福島原発によって状況は一変。19人は放射能を避けるため全国各地へ。残った園児は4人、そのうち2人は卒園しました。

2011年、福島市渡利地区では地域の人と一緒に保育園の園庭などの除染を自分たちで行ったそうです。しかし、線量は低下せず、やむなく福島市内の低線量地域（荒井地区）へ移転しました。

2012年4月に移転したものの、荒井地区は過疎エリア、入園する子どもがいないという状況。現在、園児は渡利地区からの児童2人と、荒井地区の新規児童2人、計4人の児童が在籍しています。低線量地域といっても場所によっては1マイクロシーベルト／時もあるので、保育は園庭のみで園児と散歩に出ることはありません。「原発事故がなければ…」と、とても悔しい思いの日々を過ごしていました。「悔しい、悔しい・・」と眠れない日々で歯をくいしばって頑張っているうちに、ほんとうに歯が砕けるということもあったそうです。

門間園長は、福島第一原発事故により保育園の運営が壊されたとして、原子力損害賠償紛争解決センター（原発ADR）に訴訟申し立てをしており、2016年3月に判決がでることになっています。訴訟中であることから、国や行政からの補償金はなく、保育園の運営や門間園長自身の気力・体力は極限状態です。

「こどものいえ」からのメッセージ

先日は「フライパンでできる鮭のフライ」が人気でした。
調理も楽で助かりました。
サイズが子どもたちにピッタリ!もっと食べたいコールがありました。

子どもたちだけでなく、実は職員もグリーンコープのスイーツに癒されています。
お昼寝の時間や、保育終了後に、ほっと一息のお供に!「渋皮栗のモンブラン」は絶品でした。

給食の材料のほとんどがグリーンコープの食材です。
食後に「20世紀梨」をいただきました。
安心して食べられることがこんなに感動することなのかと…。

福島子ども保養計画とひまわりプロジェクト

福島から送られた食用ひまわりの種を、福島以外の場所でも種をまき栽培し、秋に種を収穫します。収穫されたひまわりの種は福島に送られ、「食用ひまわり油（商品名：みんなの手）」の原料になります。販売された「ひまわり油」の収益は、福島の子どもたちの保養（放射能の心配のないところで遊び活動する）等に役立てられ、福島の状況を忘れない取り組みを進めています。それが「ひまわりプロジェクト」です。

グリーンコープは、各単協の施設や福祉施設、物流センター、店舗、組合員宅など、さまざまなところでひまわりの種を蒔き、栽培し、種を収穫する…「ひまわりプロジェクト」に賛同し、2014年から取り組みを開始しています。2014年は80kg、2015年は120kgのひまわりの種を福島にお届けました。

2015年8月3日～6日の夏休みに福島の子どもたちがグリーンコープの施設や関係施設にやってきて、思う存分に遊びました！

糸島にて

神在太陽光発電所

糸島の海でスイカ割り

熊本サンシャインワークスにて

無名舎（柳川市）にて

お別れ

川下り

発表会

干潟遊び

熊本県小国町にて

GC産直生産者の畑で農業体験

木魂館にて

木魂館で発表会

GCくまもとと交流・パプアチョコ作り

北里柴三郎記念館前のひまわりの前で

熊本県小国町で滝遊び

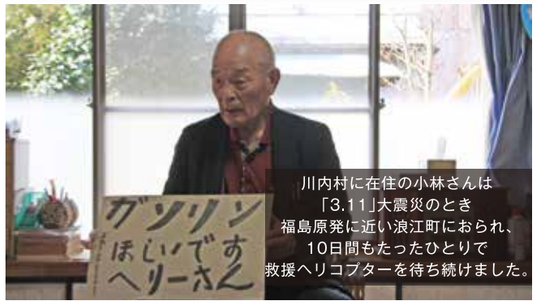
ひまわりの種、大集合

2015年 120kgのひまわりの種を
福島へ送りました!!

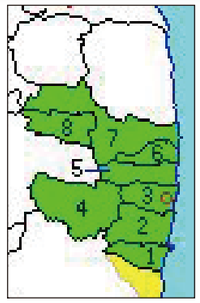
福島の障がい者施設ベーシック憩でラベル貼り。この作業も雇用の一助になります。

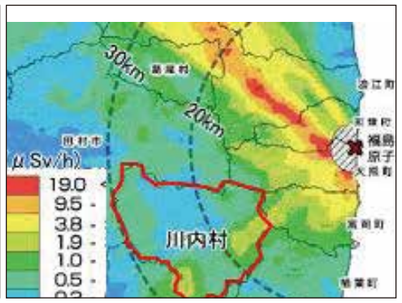
「食用ひまわり油（商品名：みんなの手）」を販売して、その収益で、福島の子どもたちが夏休みに保養する資金の一部になります。

福島県川内村と避難先の郡山仮設の支援



川内村に在住の小林さんは
「3.11」大震災のとき
福島原発に近い浪江町におられ、
10日間もたったひとりで
救援ヘリコプターを待ち続けました。





川内村の今の概況　のどかな田園が広がり、豊かな森と清流の村です

川内村は、福島第一原発から半径10km～30kmの圏内にあります。震災前の住民は約2,900人、震災前はのどかな集落が点在し、先祖代々の田、畑を所有する大家族で農家を営む人たちが多い地域でした。

しかし、村は原発事故によって帰還制限区域と避難指示解除区域に分断されてしまいました。村民の一部約500人は帰還しましたが、残りの多くの住民は村外の仮設住宅や賃貸や間借りで生活しています。

国の避難指示解除によって、帰還した住民も、村外にいる住民も国からの保障は打ち切られてしまい、年金だけで仮設暮らしをしている高齢者がたくさんいます。

NPO法人昭和横丁の志田代表からのメッセージ

福島では現在、川内村などは避難指示が解除され、支援が打ち切られてしまいました。しかし、就労や商売から病院や買い物などまで、生活の拠り所を原発のある富岡町に頼ってきた川内村の多くの人々は、自分たちだけ帰還しても生活が成り立たないと考えています。また、岩魚を釣ったり山菜を採ったりして足しにしてきましたが、森と共に生きるのでなければ、帰っても生活が成り立たない、あるいは帰る意味がないという人も多いのです。

そんな中、「財団」(グリーンコープ)との出会いがありました。「財団」と2014年に直接話をする中で、青空市場での食材提供に活用できるキッチンカー、食材保管のための業務用冷蔵庫をお借りすることになりました。また、青空市場で使っている保冷箱はグリーンコープのロゴ入りで、これも支援していただきました。仮設住民たちの憩いの場作り、井戸端会議の場(青空市場)作りを他の仮設にも行って交流を広げていこうと、仮設の住民はとてもとても元気になりましたよ。

2015年12月川内村村議になった志田代表

「3.11」から5年。仮設住宅や賃貸や間借りで暮らしている住民のほとんどは高齢の方々です。震災前は大きな農家で専業で農業をやっていた方が多く、窮屈な仮設住宅に5年間も閉じ込められたことからくるストレスや孤立感があります。野菜や米は自分たちで作っていたのでスーパーに買物に行ってパックに入った野菜や惣菜を買うことに抵抗がある方々が多いです。仮設住宅に閉じこもり、食事も口に合わずストレスになる方々が多いのです。

川内村の高齢者が5年間も郡山の仮設に閉じこもっています

仮設で青空市場を主催しているNPO法人昭和横丁の志田代表(川内村から避難、郡山南一丁目仮設 自治会長)と出会い、2014年夏から共生地域創造財団として支援をスタートしました。

仮設で青空市場を開催する目的は、仮設に住む方々が外に出て、お茶飲み会をしたり、買い物をしたりする機会をつくって、孤独で閉じこもりの高齢者をなくすことです。「財団」では蛤浜のカキや有機農園の野菜やイチゴ等、おいしいものを極力提供するようにしています。

「もっと青空市場にお茶を飲みにきてほしい」と考え、共生地域創造財団が保有するキッチンカーを利用して仮設住民に温かい料理や美味しい総菜を提供し、交流の場が広がっています。

■共生地域創造財団　連携団体一覧

No	団体名称	活動エリア
1	NPO法人ワンファミリー仙台	仙台市
2	NPO法人仙台夜まわりグループ	仙台市
3	NPO法人萌友	仙台市
4	NPO法人ほっぷの森	仙台市
5	一般社団法人 パーソナルサポートセンター	仙台市
6	一般社団法人ReRoots	仙台市
7	一般社団法人WATALIS	亘理町
8	一般社団法人スマイルファクトリー	亘理町・山元町
9	デイサービスえん	亘理町・山元町
10	一般社団法人　チーム王冠	石巻市
11	カフェはまぐり堂	石巻市
12	一般社団法人コミュニティスペースうみねこ	女川町
13	NPO法人ふうどばんく東北AGAIN	宮城県全域
14	NPO法人昭和横丁	福島県川内村
15	NPO法人シャローム	福島県北部
16	NPO法人みちのくふる里ネットワーク	大船渡市
17	NPO法人夢ネット大船渡	大船渡市
18	大船渡市社会福祉協議会	大船渡市
19	カリタス　大船渡ベース	大船渡市
20	大船渡市保健介護センター	大船渡市
21	読書ボランティア おはなしころりん	大船渡市
22	大船渡市市民活動支援センター	大船渡市
23	大船渡南地区サポートセンター鴎	大船渡市
24	末崎地区サポートセンターおたすけ	大船渡市
25	大船渡市保健介護センター	大船渡市
26	社会福祉法人大洋会	大船渡市
27	JA大船渡デイサービスセンター	大船渡市
28	赤崎復興隊	大船渡市
29	共生まちづくりの会	大船渡市
30	これからのくらし仕事支援室	岩手県全域
31	浄土宗社会慈業委員会	被災地全域
32	東北ヘルプ	被災地全域
33	認定NPO法人 ジャパンプラットフォーム	被災地全域

■財団評議員、理事名簿

	氏名	
理事	奥田 知志	NPO法人 ホームレス支援全国ネットワーク 代表理事 NPO法人　抱樸　代表理事 日本バプテスト連盟　東八幡キリスト教会　牧師
理事	立岡　学	NPO法人ワンファミリー仙台　代表理事
理事	渡部 孝之	生活クラブ事業連合生活協同組合連合会　常務理事
理事	藍島 一匡	共生地域創造財団元事務局長
理事	村上省三	生活協同組合連合会グリーンコープ連合　常務理事
理事	小田広之	生活協同組合連合会グリーンコープ連合　商品本部長
理事	中島克哉	グリーンコープ共同体　専務スタッフ
監事	林　洋一	生活クラブ生活協同組合東京　常務理事
監事	内村紀子	グリーンコープ福祉ワーカーズ連合会　理事長
評議員	加藤好一	生活クラブ事業連合生活協同組合連合会　代表理事
評議員	福岡良行	生活クラブ事業連合生活協同組合連合会　専務理事
評議員	森松長生	NPO法人 抱樸　常務理事
評議員	安江鈴子	NPO法人　ホームレス支援全国ネットワーク　理事
評議員	田中裕子	グリーンコープ共同体　代表理事
評議員	片岡宏明	グリーンコープ共同体　専務理事

共生地域創造財団とは

【目的】　生命をもっとも大切にすることを原点に、人と人とが助け合い、支え合い、補い合う共生の地域作りをとおして、支援を必要とする人々の自立に寄与することを目的とする。

【事業】　目的を達成するために、以下の事業を行う。

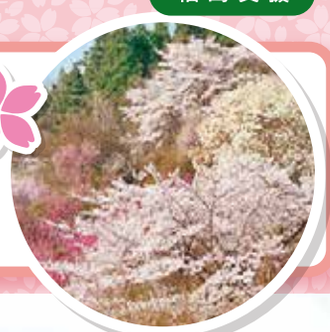
(1)災害被害者支援事業　(2)生活困窮者支援事業　(3)上記の目的に類する事業を行う団体に対する助成事業　(4)その他前条の目的を達成するに必要な事業

共生地域創造財団の活動にご協力を!!

■七十七銀行　八本松支店　普通5252326　口座名:公営法人共生地域創造財団(一般カンパ)
■郵便局　郵便振替:02250-6-126459

共生地域創造財団の支援活動、組織の経費は、全国のみなさんの寄付やカンパで賄われています。多くの方の応援をお願いします。

福島の花見山に桜を植樹します。



福島の花見山は、標高180mで、面積は約30haです。その半分近くは花卉農家（生花の花を栽培）が花や桜の木を植えています。もともと花見山は福島市内から多くの観光客が桜や花卉農家の花々を見に訪れていたところでした。

しかし、「3．11」で状況は一変。これまでのように福島から気軽に訪れること、そしてその環境を維持していくことが難しくなりました。

そこで「花見山を守る会」の高橋代表は、県内外に多くのボランティアを募り、花見山〈30ha〉中の多くを占める竹を伐採し、桜を植えるプロジェクトを立ち上げ全国に参加者を呼びかけました。竹は葉が落ちないので、付いた放射能物資がいつまでも残りますが、桜は落葉樹なので葉が落ちて、その葉を片付ければ少しでも除染につながると考えたからです。

記念として
アクリルプレートに
プロジェクト参加者の
名前とメッセージを
彫り桜の木に添えます。

「花見山を守る会」には多くの仮設避難者が集い、手仕事や交流をしています。代わって桜の木を植樹することが、仮設避難者の仕事になり、生きがいとなっています。

植樹1本5,000円の収益は、近隣仮設2,000世帯の方々の農業園芸雇用やサロンでのお茶飲み場の提供、震災遺児への義援金、農業園芸ボランティアの受け入れに使用されます。

5年経った今の被害状況

人的被害状況

	死者	行方不明者数
岩手県	4,673人	1,124人
宮城県	9,541人	1,237人
福島県	1,613人	197人
全　国	15,894人	2,562人

（2016年2月10日警察庁発表）

震災後関連死亡者数

	死者
岩手県	455人
宮城県	918人
福島県	1,979人
全　国	3,407人

（2015年9月30日　現在復興庁）

避難者数

	避難者	県外避難者
岩手県	23,525人	1,496人
宮城県	50,206人	6,533人
福島県	57,775人	43,497人
合　計	131,506人	51,526人

（2015年12月10日現在　復興庁）

皆さんからのカンパは、被災地の方たちの自立のための原資として使われます。

カンパ金総額	293,089,595円
共生地域創造財団での活用（拠出）	183,000,000円
グリーンコープ独自の支援に活用（拠出）	74,679,323円
残　高	35,410,272円

GREEN東日本大震災復興応援企画にもたくさんの支援をいただきました。

9億194万2127円

2016年2月までの総合計